



海外事情

韓国 2010 新山地防災事業団 国際共同学術会議 参加報告

池田 暁彦

いけだ あきひこ

(財)砂防・地すべり技術センター
砂防技術研究所 砂防システム研究室長



写真-1 国際共同学術会議の様子



写真-2 開催挨拶：全 権雨 教授

1. はじめに

2010年10月28日に韓国2010新山地防災事業団 国際共同学術会議が韓国江原道春川市で開催された。本会議は韓国における土砂災害を防止するために展開されている新山地防災事業の現状とその課題について議論するものであり、2008年10月28日～30日にも開催され、当センターから安養寺信夫総合防災部長が参加・発表している。今回は筆者が本会議に参加し、日本の砂防構造物について発表を行ったので報告する。

2. 国際共同学術会議の概要

本会議は“冬のソナタ”のロケ地である風光明媚な江原道春川市に位置する江原大学校60周年記念館で開催された**写真-1、2**。日韓両国の参加者ならびに発表題目は以下の通りである**表-1**。なお、本会議での発表はなかったが、会場では江原大学校の学生によるポスター発表が行われていた**写真-3**。

本会議では韓国側からの要請により日本の山地防災技術全般に関わる話題提供がほとんどであった。韓国参加者から日本側の話題提供について積極的な質問があり、韓国における山地防災事業の現状の課題を解決するための糸口を見出そうと活発な議論が行われた。筆者の発表では遊砂地に関して用地買収や除石管理をどのように行うのかといった質問があった。本会議は韓国の砂防・治山行政関係者のみならず、江原大学校の学生の方々も多く参加していたこともあって盛況であった。

3. 現地視察

本会議に関わる現地視察は実施されなかったが、韓国砂防協会の金 玫植室長の案内により、ソウル市瑞草地区牛眠山で発生した土石流災害現場を視察した。

2010年9月21日にソウル中心街に位置する瑞草地区牛眠山において2.5haの崩壊が発生し、土石流となって流下した**写真-4**。土石流発生時の降雨状況は日雨量293mm、最大時間雨量98.5mm、3時間雨量233mm（江西地区）である。土石流は流域の下流端に位置する床固工（H=1.5～2.0m程度、**写真-5**）によって捕捉され、幸いにも直接的な災害には至らなかった。しかし、牛眠山はソウル市民の憩いの場となっている公園で登山道も多く、その上、床固工の下流には片側6車線の重要幹線道路が位置し

ていることから、仮に今回よりも規模が大きい土石流が発生した場合、甚大な被害が生じた可能性が高い。

金室長によると韓国砂防協会では、このような都市地域における土石流災害を懸念し、早急な対応の必要性を韓国政府に訴えているとのことであり、こうした都市地域における土石流対策の先進国である日本の技術を参考にしたいとのことであった。また、韓国では近年、環境や景観に対する社会的なニーズが高いため、土石流対策の実施に当たっては環境や景観に配慮した構造や計画とする必要性があり、事業費が増加しているとのことであった。

4. おわりに

本会議は、韓国砂防協会や大学関係者による共同学会議であったが、本会議の一週間後に日韓土砂災害防止技術会議が開催されている。韓国は日本と同様な土砂災害が多く発生していることから、今後も官学分野ともに密な情報交換を行って連携を図り、土砂災害防止に取り組むべきだと考える。

最後に、風光明媚な春川市での会議開催ではあったものの、スケジュールの関係で春川市では会議以外の自由時間がなかったので、今度は是非ゆっくりと訪れたいと感じている。

表-1 調査行程等

	氏名	所属	発表内容
日本側参加者	木村 正信	岐阜大学教授	「土砂災害を防止するための山麓域の保全」
	柳井 清治	石川県立大学教授	「木材を使った災害防止工法とその環境保全効果」
	山田 孝	三重大学教授	「土石流発生機構解明のための溪床堆積物内の伏流水変動実態の観測」
	福岡 浩	京都大学准教授	「先進的のリングセン断試験機と高速地すべり運動機構」
	小南 裕志	(独)森林総合研究所	「アメダスデータを用いた日本全国の積雪分布推定と表層雪崩の予測」
	池田 暁彦	(財)砂防・地すべり技術センター	「近年の日本における砂防構造物について」
韓国側参加者	全 槿雨	江原大学校教授	
	朴 鐘旻	全北大学校	「気象異変に伴う山地土砂災害および濁水発生危険図に関する予測技法の樹立」
	李 時泳	江原大学校	
	李 定洙	江原大学校	
	金 玟植	韓国砂防協会研究室長	



写真-3 ポスター発表の様子



写真-4 ソウル市瑞草地区牛眠山の土石流流下後の現場



写真-5 土石流を捕捉した床固工